

わが国におけるスポーツ組織の 形成過程に関する研究 (I)

日 下 裕 弘

はじめに

1978年, J. W. ロイ (Loy), B. D. マクファーソン (Mcpherson), G. S. ケニヨン (Kenyon) らは, 社会現象としてのスポーツを分析する視角として, ゲーム事象としてのスポーツ, 制度化されたゲームとしてのスポーツ, 社会的制度としてのスポーツ, 社会参与の一形態としてのスポーツの4つをあげ, それぞれ異なったアプローチからの研究が必要であるといっている。その中でロイらは, スポーツが制度化された性格をもっていることを示すために, 他のいろいろな「ゲーム」と「スポーツ」との相違を, 組織的局面, テクノロジー局面, シンボル局面, 教育局面において比較し, その組織的局面においては, チーム, 後援団体, 統轄団体の3つの側面に関する両者の差異を概略的に例示している。さらに, 彼らは, 近代スポーツをプレイと労働の連続体上に位置づけ, プレイからゲーム, スポーツ, アスレティックス, 義務的作業, 労働へとその連続体上を進むにつれて, 道具的, 実用的な活動としての性格が強まり, 反対にその連続体を逆行するに従って, 非実用的, 表現的性格が強まることを示している¹⁾。

つまり, 彼らによれば, 未組織なプレイとスポーツとの差異は, その内部に存在する社会的諸秩序の複雑化, 精密化の程度にあり, プレイからスポーツへの移行は, 分析的には制度化の過程としてとらえることができるというのである。

Loy らの主張するように, プレイと労働が果たして同一の連続体上に位置するものとしてとらえてよいものであるかどうかは, さらに検討を必要とする問題であろうし, また彼らが提示

している組織や制度の概念に多少の曖昧さが残らないわけではないが, スポーツの世界に存在する全ての秩序を制度としてとらえ, それらを未組織なプレイと比較した時の差異を, 地位—役割連関における組織化, 制度化の程度に求めようとする考え方は, ひとつの理論的仮説として重要であろう。

さらに, スポーツがプレイとして, また, 未組織なゲームから徐々に発達したものであるかどうかは, 種目によっても異なる問題であろうし, たとえスポーツが, W. G. サムナー (Sumner) がいう「自然生長的制度」のように, その成立の起源において, 未組織なプレイの状態から次第に組織化され, 発展したものだとしても, それが, 精神的土壌, 慣習, もしくは伝統の異なる他の集団や社会に移入され, 伝播した場合にはどうなるのか。こうした問題は, 今後のスポーツの文化社会学的研究における重要な課題のひとつであるように思われる。

I. 研究の目的

本研究は, わが国におけるスポーツ組織の形成過程, 即ち, 外来文化としてのスポーツが日本に移入され, 日本という環境の中で育ち, 普及・伝播し, その全国的な組織体が形成されるまでの約70年間にわたる発展の過程をロイらの提示する理論的仮説を基本的な枠組とし, 特にその形態的側面を中心に分析することによって, 形成期におけるわが国のスポーツ組織の発展のし方, およびその特性を明らかにすることを目的としている。

ひとつのケース・スタディーとしての意味をもつ本研究は, 従って, スポーツ組織一般に関

する彼らの仮説をより精密化するための基礎的データとして役立つであろう。

II. 論文の構成

本研究では、わが国におけるスポーツが移入、紹介された時期から、その全国的、総合的組織体が形成されるまでの過程を、大よそ次のような6つの時期に分けて分析する。即ち、

1. 一時的な楽しみを求めるだけのインフォーマルな遊戯集団が発生し始める時期、
2. 常連が定まりつつあるが、その活動形態や構成においてインフォーマルな同好の集団が発生し、個別的な試合を行ない始める時期、
3. 校友会組織の一部としてのフォーマルな運動部が設置され始める時期、
4. 試合のための連合組織が形成され始め、それによってスポーツ集団が増加する時期、
5. 各種目別の競技団体が設立され始め、全国的な組織が結成される時期、
6. わが国における全国的、総合的スポーツ組織が形成される時期、

である。(本論文Ⅰは、3の段階までである。)

III. わが国におけるスポーツ組織の形成過程

周知のように、わが国においては、スポーツはそのほとんどが明治期に移入されたのであるが、中でも最も古いのが漕艇と野球であり、陸上競技、庭球、フットボールなどがそれに続く。野球と軟式庭球は、明治、大正、昭和(戦前)を通じて最も普及したスポーツである。特に野球は、現在でもわが国の代表的スポーツであり、行なうスポーツとしても、また見るスポーツとしても古くから日本人によって愛好されてきた外来文化である。

1. 遊戯集団の発生

明治初年から同10年代初期にかけて、スポーツ好きの外人教師や、外国に留学し帰朝した日本人を中心として、そこに集まった書生たちが、学業の余暇に、一時の楽しみを求めている

種の遊びを行ない始めた。

明治5年、第一番中学で、ホーレス・ウィルソンという外人教師が米国から持参したボールとバットをもち出し、在校生を駆り出しノックをしている。書生たちはこれをキャッチして遊んだ²⁾。ウィルソンの後任、E.H.マジエットもまた Baseball 好きで、書生たちといっしょにこの遊びを楽しんでおり、明治8年頃からは、米国留学から帰国し、同校に入学した木戸孝正や牧野伸顕らの影響もあって、開成学校のこの遊びはたちまち大流行となりゲームらしきものを行ない始めている。当時のルールによると、ボールは全くカウントせず、下投げであった³⁾。このゲームはすぐに、隣合わせにあった東京外語学校(第一高等学校の前身)に伝播する。ひとつ上級の学校で行なわれていたこの遊びを、うらやましげに垣間見た生徒たちが、見よう見真似でそれを行なったのである。それも、「道具が手に入らないので、靴屋に命じて皮を縫い合わせ、その中に鉛の塊などを入れて恐ろしいボールを造り、自ら木を削ってバットを造り、その柄に『一撃生風』というような句を刻んで、それを振り回す³⁾」という状態であり、ルールなども平気で無視して行なっていたという。

一方、明治6年頃の開拓使仮学校でも、米人教師のアルバート・ベーツが、本国から持参した1本のバットと3個のボールで、生徒たちに Baseball を教え、毎日放課後に校庭で、2チームに分けてゲームを行なわさせ、自らは審判をしている。同7年頃には、仮学校のこのゲーム熱はさらに高まった。しかしながら、面倒なルールを英語がよくわからない少年たちに会得させようというのであるから、ベーツの苦心も一通りのものではなかったらしく、また、当時は、国内のどこを探しても用具などを売っているところはなく、皆素面素手で豪球を扱ったものだから、負傷者が続出するという有様だった。そこへ、得能通要、大山助市、服部敬次らの三少年が、これも米国から帰朝し、本場で覚えた Baseball を指導した。彼らは英語にも達者であったので仮学校の Baseball は飛躍的に

進歩したという⁴⁷。

また、明治10年頃の札幌農学校でも、デビッド P. ペンハーローという教師が、生徒たちと簡易な Baseball ゲームを楽しんだという記録⁵⁷もある。

このように、すでに明治初期に書生同志が2組に分かれてゲームを行っていたという事実があるが、田原茂作によれば、必ずしも9人で行なわれていたのではなく、子供の「三角ベース」といったものであり、「その日集まったものが9人あれば、8人が守って1人が打者となり、打者はアウトになるまで何度でもバッターに立ち、その打者、走者を一塁手が刺せば一塁手が代って打者となり、捕手がアウトにすれば捕手が打者になる」といった方法で行なわれる場合が多かったようであり、「誰しも打者となることが最も得意であった」という⁶⁷。

明治6、7年頃、高楠順次郎や南岩倉具威男など、当時「モダン」と呼ばれた人々が、外国留学先から面白い遊具としてお土産に持ち帰った用具で、ただ打ち合っただけを楽しむという Lawn Tennis を行なっているが、なにぶん用具の補充の道のない当時のことであるから長続きするはずもなく、後に内地で和製のボールを造った形跡もあるが、それとても到底、真似のしきれない外国産のボールをやっとのことで造った手造りのボールを使用していたというのであるから、その様子もまた推して知るべしであろう⁷⁷。

また、同11年には、体操伝習所のリーランドが、米国から取りよせた若干のテニス用具で、ボールの打ち方などを指導したという記録がある⁸⁷が、これも本格的なものとは思えない。

ボートが「ハイカラ」の代名詞であった明治6、7年当時、開成学校の幹事であった服部一三は、不要になった米国の捕鯨船のボートを7、8隻購入し、野田屋という船宿にあずけておいた。同校の書生たちは、この艇を盛んに漕ぎ廻り、花見の屋形船などに漕ぎ寄り、酒の馳走になるなどして、無邪気な Rowing を楽しん

だようである⁹⁷。天下の書生をもって自負していた当時のこうした学生のひとりである岡山兼吉が、課外の余暇に、終日、夢中になって舟遊びを行なったことを、三浦力太郎は、次のように述べている。

「科業の余暇には、君の愉快とせる所は、遠足と舟遊の二つにてありし（中略）その舟遊には、即ち、墨江に溯り品海に棹し、或は端艇を操りて終日帰りを忘れたることありぬ」¹⁰⁷（明治12、13年頃）

明治10年代前半に行なわれた「バッテリー」漕ぎの状況は、当時の書生であった高田早苗、丹羽鋤彦、山口鋭之助らの次のような懐古談を手掛りにして知ることができる。

「砂川雄峻氏の主張で、学生の間から醵金し合って飛鳥丸というボートを1隻造ったことがある。（中略）そのボートは四挺立で、よくお茶の水附近まで漕いで来たもので、普段は野田屋に預けてあった」。（高田草苗談）¹¹⁷

「初めは一隻であったが、間もなく石川島造船所で新たに二隻造って、みんな元気に漕いでいた。当時神田川は今日と違って、万世橋からお茶水、水道橋に至るまで樹木が鬱蒼と茂っていて、絶好の遊樂地であり、従って学生は、隅田川からボートで漕ぎ上り、お茶の水附近にボートを止めて散策する者が多かった。」（丹羽鋤彦談）¹²⁷

「私達はよくお茶水附近を漕ぎ廻ったもので、附近にあった高等師範の学生たちがボートの操縦を知らずに困っているのをふざけたものだ。（おそらく「からかった」という意味であろう）」（山口鋭之助談）¹³⁷

この他、明治10年頃の東京外語大学、工部大学、一橋大学、慶応義塾などにも1、2隻のボートがあったという記録があり、また、明治13年からは、体操伝習所で、坪井玄道が学業の余暇、書生たちにボートを漕がせている。一橋から日本橋を経て永代橋に出で、それから向島まで漕いでいくのは容易ではなかったらしい^{147,157}。

明治6年、海軍兵学寮の英国人、アーチフォールド・ルシアス・ダグラス少佐とその部下33

名が、「レクリエーションと体力強化」のためにフットボールを行っており、また同7年には、工学寮の英国人教師、ライメル・ジョンズが学生たちにフットボールを教えたとされているが、そこからこのゲームが普及するということとはなかったようである¹⁶⁾。

一方、明治10年代、坪井玄道は、体操伝習所の学生たちに Football を紹介しているが、同18年頃までには、この伝習所を卒業した者たちが3府37県に教師として赴任したために、正規のゲームではない、いわゆる「円陣フットボール」とか「対列フットボール」といった簡易なものが、より下級の学校の遊戯として広まっている¹⁷⁾。

フットボールの場合、ゲームらしいゲームが行なわれるようになったのは、明治20年代末期とされているが、明治23年、大阪の聖三一神学校のポールという人物が、生徒にラグビーともサッカーともつかない Football を教えている。それは、サッカー用のボールを用い、地面をほう球は足で処理したが、宙に飛んで来るものは手でキャッチし、そのままゴールに投げ込むというものであった。付近の外人共有の遊園地の芝生で行なわれたこのゲームは、現在のフィールドの半分ぐらいの空間はあったが、ラインなどは引かれておらずゴールといえば竹の棒を2本立て、バーは糸を結んで間に合わせていた。プレーヤーも、シャツに股引き、ズック靴というお粗末な姿であり、日曜日などの「エキジビジョン・マッチ」には、見物人も飛び入りで参加し、大いにエンジョイしたという。さらに、明治36年には、高田という人物が、神戸一中の寮生にフットボールのゲームらしきものを教えたという記録もあるが、詳細は不明である¹⁸⁾。

いずれにせよ、こうした記録に見られる担い手たちの活動形態や集団としての人員構成を考慮すると、次のようなことがいえよう。即ち、「文明開化」、「富国強兵」のスローガンのもとに、外国の諸文化を摂取すべく動員された外国人教師や留学生等、主として外国文化に直接的に接触することのできた高等教育機関の人々

によって紹介され、移入された外来のスポーツは、当初においてはいずれも、きわめて未組織な遊びとして行なわれていた。それは、学業の余暇、その時々、(非定期的、非継続的に)、自然の地形がもっている手ごろな空間、校庭もしくは空地等で、粗末なしかも数少ない道具、いい加減なルールそして未熟な技量のもとで行なわれており、その仲間にはこれといった特定のメンバーや役割というものはなく、日頃から互いに親しくしている者たちが、一時の楽しみを求めて集合した、きわめて未組織でインフォーマルな遊戯集団であった。しかも、こうしたきわめてルーズな状況のもとに集まった遊び仲間達のほとんどは、同性同年輩のしかも対等な立場で交際している同輩集団としての性格の濃いものであったといっていよう。

2. インフォーマルなチームの出現

ところが、明治10年代から同20年代初期になると、前述した遊び仲間の中から、それらの遊びを特に愛好し、熱心に行なう、いわゆる「常連」なるものが現われ、次第にメンバーを特定化し、一応の顔ぶれをそろえた同好の役割集団、即ち、インフォーマルなチームが生まれ始める。彼らは、互いに個別的な試合を行なうようになる。

野球の代表的事例としては、東京大学法学部チーム、工部大学ベースボール・チーム、駒場農学校チーム、青山英和学校チーム、白金クラブ、立教大学セント・ポール・クラブ、三田ベースボール・クラブ、東京大学予備門ベースボール会、東京商業学校チーム、新橋アスレチック・クラブ、ヘラクレス・クラブ、溜池クラブ、東京クラブ、赤坂クラブなどがあるが、ここでは、紙面の都合上、それらのいくつかについて記しておこう。

① 工部大学ベースボール・チーム

明治16、17年頃、虎の門の工部大学で、エビソン教授の尽力により、ベースボール・チームが出現した。当時、同校には、チズンという若手教授がおり、その指導のもとに、山口俊太郎、堀三之助、渡辺六郎、秋山、丹羽、中山、

生田、増山、そして岩岡保作といった連中が揃っていて、ひとつのチームを構成していた。岩岡などは、後述する新橋クラブの平岡にカーブの秘術を教えてもらい、終日ピッチングの練習をし、夜も寄宿寮の廊下に出て、ろうそくの明りをたよりに盛んにボールを投げ続け、敵の挑戦を待っていたという¹⁹⁾。

② 駒場農学校チーム

明治15年頃、駒場の農学校にベースボール・チームが出現した。メンバーには、田原休之丞、知識四郎、伊知和徳之助、上田らがおり、その年、新橋クラブと日本最初の邦人による対抗試合を行なったが、交通機関もなく、また、得点も68対52とか、105対75と多かったために、ほとんど一日がかりの試合だったという^{20),21)}。

③ 立教大学セントポール・クラブ

明治18年頃、築地時代の立教大学に、同校の有志が集まり、セントポール・クラブというベースボール・チームを組織し、若手外人教師がそのコーチの任にあたっていた。立教大学チームは、酒の席での喧嘩に結着をつけるために、前述した工部大学チームと試合をすることを約束し、毎日、校庭で練習したという。結局、この企ては工部大学側に米人教師が混っており、不公平であるという理由で、双方入り乱れての紅白試合を行なうことになったが、先の約束通りに行なわれたならば、この試合が日本最初の対校試合となっていたにちがいない²²⁾。

④ 新橋アスレチック・クラブ

明治4年から同10年の7年間、米国に留学した平岡熙は、帰国後、神田三崎町の屋敷で、弟の寅之助などを相手に、下手投げのキャッチ・ボールを行っていたが、そこに出入りしていた上流階層の子弟が仲間に入れてくれと頼み込むようになると、今度は、同町の練兵場で本場直伝の Baseball をやり出した。平岡ら面々は毎日のようにボールを打ち、追いかけたという。平岡は同11年、工部省の鉄道技師に任ぜられると、職員をかき集め、ここに新橋クラブ、別名アスレチック・クラブを組織した。平岡を中心に、寺沢、佐々木、千葉、橋本、そして外

人技師らは、ナイン一同当時としては立派なユニフォームをつくった。当初は無軌道に行っていたこのベースボールも、明治15年頃には、米国のスポルデング社直送の用具一式(ミット、マスク、バット、ボール、ベース、ネットなど)とルール・ブック、そして「保健場」と呼ばれるグラウンドを完備し、学生チームを指導するようになる。1ヶ月の会費は金1円であったという²³⁾。

⑤ ヘラクレス・クラブ

上記の新橋クラブに対抗するかたちで結成されたチームが、三田の徳川達孝を中心とするヘラクレス・クラブである。メンバーには、達孝の他に鍋島直映、生田益丈、市川延次郎、早川政次、上野山増興、藤田卯之助、三田文夫らがいた。「広い庭園は勿ち築山を壊し、泉水を埋め、小山の林を切って地は均された。広さ数千坪、見渡す一面の平地に若人の勇ましき姿は毎日見えた」という。真赤とグリーンの2種類のユニフォーム、そして凝りに凝った「桐」のバットを作らせ、新橋チームと度々試合を行なったが、見物人は極めて少なかったようである²⁴⁾。

しかしながら、これらの社会人チームは、中心となる人物がいなくなると、すぐに自然消滅してしまう。新橋クラブの残党は、溜池クラブ、赤坂クラブ、東京クラブに分派した。

⑥ 溜池クラブ

明治18年、赤坂の溜池にあった工部大学のグラウンドに誰ということなく自然に集まった十数名の若人があった。その中には、前述した諸学校の学生を中心とする山田三次郎、岡田三郎助、鍋島直映、仁禮景助、大寺純蔵、町田一平、大久保駿態、村尾次郎、黒田、赤羽克巳、志岐三次、平岡寅之助、和田八千穂らがいた。彼らは「唯一つのパーティーとなって心から相楽しむだけ、語を換えていえば、心の底にマークを飾っていたとでもいうか、ボールを通していつしか刎頸の交わりがあった。ボールの練習が済んでから一緒に語り合ったり、友人の家から家へと廻って互いに打解けたり、時には一杯の酒に気焰万丈のこともあった」という²⁵⁾。

こうして、明治10年代から出現し始めたベースボール・チームは、互いに幼稚ではあるが、きわめて蛮的な競技を行ない始め、同20年頃からは、こうした「群雄」が彼らの小世界の内部での覇権を求めて割拠し、盛んに「マッチ」を行なっている。横浜外人チームや新橋クラブを除けば、駒場農学校や東京クラブのチームが盟主格であつたらしい。

これまで気軽な楽しみとして行なわれていた「ベーすぼーる」は、この頃からより本気で行なわれるようになるのである。それは、正岡子規の次のような文章を見ても明らかである。

「…稍其完備せるは23, 24年以後なりとおぼし。これ迄は真の遊び半分という有様なりしが、此時より稍真面目の技術となり、技術の上に進歩と整頓とを現わせり。少くとも形式の上に於て整頓し初めたり。…」²⁶⁾

一方、漕艇の場合には、明治10年頃、数少ない「バッテラ」を中心に、東京大学の理学部関係者によって「舟行組」という同好の集団が結成されたのであるが、それらのボートが古くて使えなくなると、2~3年で解散してしまう²⁷⁾。

また、明治10年といえば、後の第三高等学校が大阪にあった時期であるが、そこに「黒派」という学生有志のボート集団があり、大阪の海や川を漕ぎ、後に京都に移転してからは、白や赤に分かれて覇を争い、これが青党に合併し、明治20年以降に「千鳥クラブ」となり、京都疏水や琵琶湖へとコースを開拓していったという記録がある²⁸⁾が、詳細は不明である。

ボート界の先鞭をつけ、戦前のボート界をリードし続けたのは、東京帝国大学である。即ち、東大では、明治16年頃から寄宿生の間に急激にボート熱が高まったのであるが、その中から「常連」なるものが集まって、「忘漕会」(M. B. C.) ほかいくつかのインフォーマルな集団が出現し始める。それは、ボートを漕ぐことの楽しみを共有する連中が、自主的、自発的に結成した同好の集団であつた。即ち、次のような名称をもつ集団である。

・忘漕会 (Member of Boat Club. 略称 M.

B. C.)

・スミダ・ローイング・クラブ (略称 S. R. C.)

・ロー・クラブ (略称 R. C.)

・オリエンタル・ローイング・クラブ (略称 O. R. C.)

・パシフィック・ローイング・クラブ (略称 P. R. C.)

そのうち、M. B. C. においては、文学部の日高真実が頭目格で、メンバーには、阪倉銀之助、山口鋭之助、原田真介、山崎甲子次郎、林権助、林田亀太郎、杉浦吉太郎、広瀬吉郎、志摩友雄、石川石代、川上亮、山田新一郎らが、また、O. R. C. には、武田千代三郎、神崎東蔵、神尾三郎らが、そして、S. R. C. には、岸清一、島田剛太郎らがいた。

東京帝国大学漕艇部五十年史には、彼らの活動状況が次のように記されている。

「…(これらの) ボート会が、雨後の筍の如く創立され、ここにボートの群雄割拠の時代を現出したのである。而してこれらのボート会が或は鴻台へ、或は横浜へ遠漕したり、或は荒川溯航や、品川碇泊の軍艦排観に出かけたりして隅田川を我がもの顔に漕ぎまくった。…」²⁹⁾

しかしながら、わずか2隻のボートをめぐってのこれら多数の同好集団の乱立は、当然その統一と制限を行なう特定の調整機関を必要とし、やがてここに「走舸組」と呼ばれる組織体が結成されたのである。

こうしたボート熱の高まりと共に、明治16, 17年頃から、集団同志のレースが始まるのである。即ち、同17年の東大でのボート・レース、同18年の工部大学での競漕会、そして、同20年の東京高等師範学校での校内競漕などである。因みに、明治17年に行なわれた東大でのボート・レースは、走舸組が開催したもので、毎年春秋2回、適宜の場所を選び行なうことを定め、この日(10月17日)は、隅田川吾妻橋の上流、往復十余町(1町は約109メートル)のコースで行なわれた。技量のほうは、「未だ十分の熟練とは申し難き」状態であり、また、「仲間中

のことゆえ、自から競争心も薄き気味」であつたらしい³⁰⁾。また、明治20年の東京高等商業学校でのレースは11月3日、隅田川言問の上流において、四挺の小さなステッキ・ボートを入れ、それぞれ標識の小舟を右から回って帰ってくるといふ約700メートルの回航コースで、17の番組が行なわれた。その状況は「右から回るところをつい左から回ってしまい、しかも帰途三番がオールを流してしまいました。(中略)実は、私がまちがって左から回りかけた時、リーダーは、『なに、かまうものか、このまま漕ごう』といていた…」(佐羽総太郎)というものであった。

当時のレースが、未だ統一ルールのない時代におけるその場かぎりの競漕であったことがわかる^{31),32)}。

ラグビー、テニス、サッカーなどの同好チームの誕生は、野球や漕艇に比べて时期的にやや遅れた。例えば、ラグビーの場合には、次のような集団である。

- ・明治32年、慶応義塾の「ゼ・バーバリアン」、「敷島クラブ」
- ・明治38年、学習院の同好者集団
- ・明治38年、第一高等学校の同好集団
- ・明治40年、太田中学チーム
- ・明治41年、京都三中チーム
- ・明治41年、京都二中チーム
- ・明治45年頃、平安中学チーム
- ・明治45年頃、「錦華殿クラブ」
- ・大正3年頃、「神陵クラブ」
- ・大正3年頃、「京都クラブ」
- ・大正3年頃、「京一中クラブ」
- ・大正3年頃、津一中の同好集団
- ・大正5年頃、「天狗クラブ」
- ・大正5年頃、「弥栄クラブ」

慶応のゼ・バーバリアン・チームは、猪熊隆三や森五郎兵衛らを中心に、ラグビーそのもののもつ興味に引かれて集まった山崎不二雄、松岡正男、伊藤重郎、浜田精蔵、鈴木四郎、小倉和一、岡本謙三郎、岡本一之助らの面々によって構成されていた。やがて、このクラーク直系

ともいうべきチームに対抗するかたちで生まれたのが、海江準一郎、北田内蔵司、吉武吉雄、福永らを中心として組織された「敷島クラブ」である。類は友を呼んで安藤復蔵、田宮弘太郎、太田直巳、宮沢恒治、村瀬末一、菅谷隆良、高橋忠松、山田久司らもそのメンバーに加わった。かくして、塾内だけで、ラグビーのゲームができるようになったのであるが、なにしろ、明治37年の塾内大会においてでさえ、「蟻の獲物を取合うにも似た有様」であったのであるから、慶応最初のクラブである両者のラグビーも、ゲームの真似事にすぎないものであったにちがいない³³⁾。

上記は、慶応義塾ラグビー部が設立される以前の、いわゆる「揺籃期」の状況であるが、こうした事柄は、慶応に限らず、第三高等学校、同志社、京都一中、京都帝国大学、第一高等学校についても共通していることであり、また、それはラグビーに限ったことでもない。

その他のラグビー同好集団についても、特定の人物を中心として興味を同じくする者が加わってチームを結成し、時おり、未熟ながらもその技量を競うべくゲームを行なっている点、上述の慶応義塾の2クラブの場合と同様な組織形態をもつものであった^{34),35)}。

かくして、この段階での担い手は、私的な交友関係を基礎とする遊戯集団としての性格を残しながらも、特定のスポーツを通しての仲間集団としての性格を強めている。即ち、彼らは、互いに技量を競い合うことを目的とし、試合をめぐる小さな蛮的コミュニティーを形成し始め、メンバーを特定化したよりフォーマルな集団として内部の役割を分化させ始めているところにその特徴がある。これらのチームは、いずれも、学校などの他の組織や集団とは直接的な関係をもたない自主的、自律的集団であり、興味を同じくする者同志が自然に集まった、同好のインフォーマル・チームであったといつてよいであろう。

さらに特筆すべきは、当時、彼らにとっては、スポーツをすることそれ自体がすでに、ひ

とつのプライドであったということである。即ち、開国間もない日本に於て、自分たちだけが西洋の文化としてのスポーツを担うことができる存在であり、この自己誇示的な楽しみを享受しうる存在であるという意識である。それらは、上流階層の子弟としての彼らの特権意識に裏づけられたプライドの表現であったのである。スポーツが担い手のステータス・シンボルとしての意味を含蓄していたことは、戦前におけるわが国のスポーツの担い手に一貫して看取できるひとつの特性である。

3. 運動部の誕生とその発達

明治10年代から出現し始めた上記の自律的な同好集団は、同20年頃から、学生の課外活動全体を統轄する校友会もしくは体育会組織の一部としての位置を与えられるようになる。即ち、

校友会等からの金銭的援助のもとに、学校の教育方針に則って活動すべき「運動部」が誕生する。運動部は、その目標を達成するために、次第にその集団内部の諸地位を確立し、合理的に組織づけられ、標準化された諸役割を分化させていく。ここに、フォーマルなスポーツ集団が出現するようになるのである。それらの集団は、それぞれが絶えず新しいメンバーを補充することによって存続できるようになる。

明治20年代から同30年代にかけて誕生した校友会（運動会、体育会等々、名称は様々である）、およびその下部組織としての運動部には、表1のようなものがあつた。

これらの運動部は、運動熱の高まりと共に増加し専門化し始めた遊戯的集団を統一すべく、学校の職員、OB、そして学生が中心となり、

表1. 初期の校友会組織およびその運動部

(36)～(45)

年 号	学 校	校友会	運 動 部
明治19年	東京帝国大学	運 動 会	陸上および水上競技 明治31年に社団法人となり、漕艇部、陸上運動部、球戯部、水泳部、柔道部、撃剣部、弓術部の7部を設置した。
明治22年	東京高等商業学校	運 動 会	端艇部、柔道部、弓道部の3部より成る。
明治22年	学 習 院	輔 仁 会 (体育部)	ベースボール部、水上部など。
明治23年	第一高等中学校	校 友 会	(文芸)、端艇、撃剣、弓術、ベースボール、ローンテニス、陸上運動、遠足の9部を設置。
明治23年	東京府尋常中学校	校 友 会	(演説討論部)、運動部、遠足部、遊泳部、漕艇部、撃剣部、柔道部の7部を設置。
明治24年	第五高等中学校	龍 南 会	(雑誌部、演説部)、撃剣部、柔道部、戸外遊戯部の6部を設置。
明治25年	第三高等中学校	壬 辰 会	(演説討論部)、(雑誌部)、撃剣柔道部、弓術部、陸上運動部、水上運動部、ベースボール部の7部を設置。
明治25年	慶応義塾	体 育 会	剣術部、柔術部、ベースボール部、端艇部、体操部、弓術部、操練部、徒歩部を設置。
明治26年	第二高等中学校	尚 志 会	(文芸部)、(科学部)、武芸部、(雑誌部)の4部を設置。
明治29年	東京高等師範学校	校 友 会 (運動会)	柔道部、撃剣及び銃槍部、弓技部、器械体操及び相撲部、ローンテニス部、フットボール部、ベースボール部の7部を設置。(生徒は必ず1つ以上の部に所属し、毎日30分以上これらの運動を行わなければならなかった。)
明治30年	東京専門学校 (早大の前身)	体 育 部	撃剣部、相撲部、庭球部、野球部、校外運動部、器械体操部、柔術部、弓術部の8部を設置。
明治30年	京都帝国大会	同 学 会 (運動会)	庭球部、野球部、弓道部、剣道部、柔道部、端艇部、馬術部の7部を設置。
明治31年	東京府師範学校	尚 武 会	剣道部、柔道部、器械体操部、野球部、テニス部の5部を設置(生徒はいずれか1つの部に所属しなければならなかった。)
明治31年	東京阪立開成中学校	校 友 会	端艇部、撃剣部、遠足部、水泳部、英語部の5部を設置。
明治35年	東京高等商業学校	一 橋 会	ローンテニス部と端艇部が主たる部であり「一橋会員は総て端艇部員たる事」とされていた。

一定の会費を徴収し、規則を成文化して組織した「校友会」、「体育会」、等の下部組織であり、その精神的、物質的援助を受けるフォーマルな自治的組織集団として発足し、発達していくのである。運動部の数は、新しい運動部が設置されることによって次第に増加していく。例えば、早稲田大学における運動部数の増加状況

を見てみると、明治43年に5部にすぎなかったものが、大正13年には14部に、そして昭和17年には25部に増加している⁴⁶⁾。

そこで、野球、漕艇、およびラグビーを例にとり、全国の運動部の発生状況を、それらが旧制中学校に出現するまでの期間について、種目別に調べてみよう。（表2）

表2. 種目別に見た「運動部」の発生状況

M…明治年間 T…大正年間 S…昭和年間

野 球	漕 艇	ラ グ ビ ー
M27 一高 " 二 M26ごろ 三 M中期 四 M24. 41. 五 M33 六 M35 七 M41 八 M26 山口高商 M25 東北学院 M23 学習院 M22ごろ 同志社 M25 慶大 M34 早大 M39ごろ 明大 T初期 法大 T初期 立大 T 7 東大 M20's 愛知一中 M24ごろ 水戸中 " 宇都宮中 " 秋田中 " 神戸一中 " 神戸商業 M30's 横商 " 郁文館 " 青山学院 " 正則中学 " 独逸協会 " 明治学院 " 慶応普通部 など 明治30年頃から府県庁の所在地の公立中学ではほとんど野球が行なわれるようになり明治35年頃から全国都々裏々に普及し始める。	<関東> M19 東大 M23 一高 M34 高師 M35 外語 M20ごろ 高商 M33 高工 M中期 学習院 M25 慶大 M35 早大 M38 日大 M38 明大 など <北越> M28 四高 M中期 新潟師範 " 新潟中学 " 新潟商業 など <中部> M32 愛知一中 M中期 小浜中 " 四日市商 " 諏訪中 M41 八高 など 明治30～35年にかけて各地の中学校に発生した。 <四国> M28 高知一中 M29 関西中学 M中期 広島師範 " 広島中学 " 岡山中学 " 六高 " 高知師範 など	M36 慶大 M44 三高 M44 同志社 M45 京一中 M45 同志社中 T 8 京一商 T 7 早大 T10 京大 T11 一高 T12 明大 " 立教 " 高商 " 秋田運動クラブ " 大曲農業 " 鉾専ユニオン " 中学Y Bクラブ T13 高師 " 成蹊中学 " 札幌二中 " 北海中学 " 小樽商 " 札幌商 " 中央大 " 北海道大学 T14 青山学院 S 2 二高 S 3 岩手中学 " 盛岡中学 " 岩手医専 " 岩手師範 S 4 日本大学 など <関西> T 8 大阪高商 T11 大阪高校 " 天王寺中学 T12 関西大学 " 北野中学 " 立命館中学 T13 京都中学 " 彦根高商 S 2 神戸一中 S 3 神戸二中 (神戸高商, 大阪外語)など

大正10年頃から大量に発生する

野球と漕艇は、明治中期頃から、そしてラグビーは大正10年頃から、運動部が増加していることがわかる。

こうして次々に出現した運動部は、互いに個別的な試合を行なった。これらのうちでも、特に、それぞれのスポーツ界を物心両面にわたってリードした代表的集団として、次のような運動部を挙げることができる。即ち、

- ・野球……………第一高等学校、学習院、早稲田大学や慶応義塾を中心とする東京六大学の野球部
- ・軟式テニス…東京高等師範学校、東京高等商業学校、早稲田大学、慶応義塾の庭球部
- ・漕艇……………東京帝国大学、京都帝国大学、第一・第三高等学校、東京高等商業学業の端艇部
- ・ラグビー………慶応義塾、第三高等学校、同志社、京都帝国大学、明治大学、立教大学のラグビー部

などである。

次に、これらの代表的運動部のいくつかについて、その組織的局面的発達を探ってみよう。

① 第一高等学校野球部

明治20年以前の予備門で行なわれていたベースボールは「演技の規則等未だ完備せず」、球場も、「靴痕凸凹し、草根茂生し、殆んどゴロを捕うる能わざりし」状態であり、メンバーはもちろん、ポジションさえ特定化せず、キャッチボールやノック中心の活動が続いていた。ところが、明治20年春から同23年夏にかけて、「旧式が変じて新式となり、試合の景況一変して、ベースボールに一大進歩を与えたる過渡の時代」となり、時計台の前庭の平坦地に「向ヶ丘球場」をつくり、ポジションを定めて、白金クラブ等と正式の試合を行なうようになった。この時期には、寄宿舎の完成もあって、野球が校友たちの注目を呼び始め、昼食後や放課後にこれを行なう者が増え、「土手下クラブ」、「庭先クラブ」、「食堂前クラブ」、「窓下クラブ」などの同好の集団が発生し、底辺を拡大してい

った。同時に、「毎夕のノックを傍観する者すこぶる多く、遂に、拍手歓呼する一群」も生じた。これが後の「弥次隊」即ち、応援団の起源である。

こうした野球熱の高まりを背景に、「校風」発揚の場としての位置を与えられた一高野球は、「イムブリー事件」をきっかけとして、より高度化し、組織化されていく。一高は、明治23年から同37年頃までのわが国の野球界の覇者として存続し、「武士」的勝利至上主義の信条のもとに、明治28年から同35年までの8年間の戦績を、56勝10敗とした。勝ったための練習は猛烈であり、勝利の喜悦と敗北の無念とは、若き彼らの感情の両端を極めた^{47), 48), 49)}。

明治29年、一高野球の名声が全国に広まった時、木下校長は、野球部に対して次のような訓戒を送り、「文武両道」を説いた。

「予はなお諸君に望む、一、臨戦尚不失礼、勝而不慢、敗而不挫は日本武士道の本意にして、第一高等学校の夙に特色とする処なることを。二、吾人、少壮青年者は、独り技術の点のみならず、知識の点においても同じ光輝ある全勝を博するの責務あるを記憶されんことを」⁵⁰⁾。

ここに、「武士道」的精神修養を強調する一高野球信条の一端を見ることができる。

② 東京帝国大学漕艇部

走舸組を中心にボート熱が高まった東大では、明治19年に「運動会」が設立されると、ボートの用語を統一し、艇庫を完備し、ここに初めて統一ある組織のもとで各分科が覇権を争うことができるようになった。明治20年、その第1回漕艇大会の席上において、渡辺洪基総長は、ボートによって、智仁勇の徳性を涵養することを期する祝辞を行なったが、この大会は、昭和10年にはその49回目の大会を行なっている。

次第に参加チームを増し、競争を激化し、役割を分化させ、組織的なレースを行ない得るようになった「熟練」東大のボートの隆盛は、すでに周知の事実である。こうした運動会形式の競漕は、明治45年の第5回国際オリンピック大会によって刺激され、新しい目標と針路を得る

に至り、東大では大正8年頃から、国際的な滑席艇を用いた記録主義の漕艇を行なうようになる⁵¹⁾。

③ 慶応義塾庭球部

明治31年春、塾生の藤田敏夫、石田広治らが運動場の片隅でテニスを行なっていたが、それを見たクラスの連中で、テニスの心得のあった辛島渉、橋口純介、小野吉郎、松本要態らが発起して、「テニス会」を結成した。和服に下駄履きという姿であったが、会員は野球部の石田や平沼をも含めて10人程度であった。明治33、34年頃になると、塾生間のテニス熱が高まり、清遊ローンテニス・クラブ、三田ローンテニス・クラブ、ABCクラブ、三四クラブ、窮理窟クラブ等の同好者の集団が続々とテニスをやり出した。このうち、清遊ローンテニス・クラブは、会員を40名に限り、入会費50銭、毎月15銭の会費を徴収して、ラケットやボールの経費にあて、明治33年11月には、会員章をもつ者だけで大会を開催している。

明治34年5月、外語学校との対戦が決定した

ので、選手を常備することになり、会則を設け、練習を開始した。この試合を見物にきた連中が後の弥次隊の起源である。同年、清遊を中心とする上記の各クラブは、塾内にコートを設置してもらい、また、体育会組織の一部に編入されるべく団結し、ここに庭球部が誕生した。部員は、体育会費の他に、ボール等の費用を捻出するために、特別会費として毎学期50銭を負担した。当時、100名を越える部員の中には、柔道部や野球部の連中もおり、集団としてのモラルも低かったようであるが、青木、小川、内藤、武蔵野、岡田、小泉、榎郁らが順次入部することによって、次第に陣容を整え、技量も高まり、高商や高師と対校試合を行なうようになる。

明治35年の春からは、福沢大四郎、青木知四郎、田村貫一等が幹事となり、部の世話を預っていた。当時は、いかにして高師や高商と対等の地位を認めさすべきか、そして戦えばすぐ破れる庭球部の名誉のためにいかにして選手を準備するかが第一の課題であった。そうして、そ

表3. 慶大庭球部における試合数

年次 試合	明治 35 年	36	37	38	39	40	41	42	43	44	45	……
対校戦	1	1	3	6	6	4	3	7	10	5	4	
定期戦												
小大会										(3)		
全国大会												
国際大会											1	

年次 試合	……	大正 7 年	8	9	10	11	12	13	14	15	昭和 2 年	3	4	5	…
対校戦		3	1	3				4	2	1	2	1		2	
定期戦								1	6	3	2	2	1		
小大会		2	2	2			3	5	5	4	12	7	12	10	
全国大会			4	2			1	3	2	1	3	1	5	3	
国際大会									1		1		2		

(「慶応庭球三十年」P. 311～379)

の念願がかなったのが明治37、38年頃からのことであった。以後、慶応庭球部は、数々の試合を経験していく中で、実績と伝統のある運動部としての地位を確立していく。表3は、その正式試合の数を年代順に示したものである。上段は軟式時代の、そして下段は硬式時代の試合であるが、明治35年に高師と戦った試合が1回だけであったものが、大正14年には、早慶戦、関東インターカレッジ・オープン・トーナメント等の大会、全日本庭球トーナメント等の全国大会、そして、デヴィス・カップ争奪戦を含む数々の試合に参加しており、試合の数と規模を拡大していったのである⁵²⁾。

④ 早稲田大学蹴球部

大正6、7年頃、下宿屋の遊び仲間の間にラグビーの話がもり上がり井上成意をリーダーとする同好の士5、6人が楢円のボールを蹴り始めた。彼らは、虎肉試食会というメンバー勧誘対策を講じ、苦勞の末、どうにかこうにか15名程度をかり集め、大正7年の秋に、当時唯一の相手であった慶応と試合を行なった。ゴール・ポストもなく、メンバーも前後半にフオワードとバックスを双方入れ替えたという。

除々にそのメンバーが増え始めたこの同好会は、同年11月に正式に体育会の一部となった。発足当時の部員は、井上成意を主将とし、大久保謙治、国光素介、勝丸信三、角谷定正、峯浪雄を委員とする32名で、第一年度に体育会から支給された部費は、野球部に圧倒される形で、わずかに80円あった。

創部してすぐ(翌年1月)三高と戦ったが、15対0で大敗。その三高は、当時、慶応に9対0で大敗しているから、その頃の早大の実力の程が知れよう。早大は、大正8年から同10年までの3年間に3回の合宿練習を、京都や小田原で開始したが、大正11年に、同志社中学から兼子、片岡、原楨の3人が、そして京一中から清水、滝川の計5人が新しく入部し、チーム全体の技量を格段に補強してから俄然「強く」なった。当時は、彼らエキスパートの他に、柔道部や角力部の豪傑、腕白どもも入部しており、試

合は文字通りの肉弾戦であったという。早大は、毎年春、京一中、同志社、京一商などから優秀な選手が入部し、大正14年夏の沓掛での合宿には50名が参加する程に部の底辺を拡大していった。その年の戦績は、関東では慶大に8対3で破れたほかは全勝、関西遠征でも全勝であった。

打倒慶応をめざした早大は昭和2年、豪州に遠征した。その時の引率教授は喜多壯一郎、監督が木村丈一、そして主将が本領信治郎であった。遠征でスピーディーなゲーム運びと練習法を学んだ早大は、昭和3年に専用グラウンドを設け、同4年に英国からG. ケイジャーというコーチを招き、その実力と実績をあげてゆき、昭和7～8年度には、「ユサブリ戦法」によって東洋を制覇し、同8～9年度以降の早明時代を形成することになる。同11年の部員数は100名に近い⁵³⁾。

戦前におけるわが国のスポーツ界をリードしてきた運動部のいくつかについて、その発展の経過を略述してきた。紙面の都合上、限られた数の部史しか記すことはできないが、その他の運動部の部史を分析してみても、そこには、大よそ次のような発達経路が抽象できる。即ち、

- ① 遊戯的集団や同好チームの発生
- ② チーム同志のゲーム、もしくは校内大会の開催
- ③ 運動部の設置
 - ・ 成員の増加と役割分化
 - ・ 選手制度の確立
 - ・ 試合での実績
 - ・ 伝統ある運動部としての地位の確立

等である。

このように、スポーツ集団は、きわめて未組織で小規模の遊戯集団が存在した段階から、次第に運動熱が高まり、校内でのゲームや大会が盛んに行なわれるようになることによって、校友会組織の一部として公式に承認された運動部が設置される段階へと発展している。

創立当時の運動部は、ほとんどが小規模で掛

け持ち部員も多く、腕に自信のある烏合の衆と
いった状態であったが、やがて成員の増加に伴
なって集団内の諸役割を分化、専門化してい
く。成員の補充という点で重要なのはより下級
の学校からのスポーツ経験者や優秀選手の入部
である。また、試合での勝利という明確な目標
が存在する運動部内には、部長、監督、コー
チ、主将、マネージャー、第一選手、補欠、予
備軍などの諸役割が分化してきていることがわ
かる。その場合、選手というものは、自分たち
の集団の代表であるばかりではなくその上部組
織である学校そのものを代表する「戦士」的存
在でもあった。こうした学校と選手との結びつ
きを象徴し、強化したのが応援団（弥次隊）で
あった。

最後に、わが国のスポーツ組織の形態的特性
にある意味で本質的な規定要因をなしている
と考えられる、運動部のスポーツ信条とその成立
過程の一側面に言及しておこう。

明治20年代から出現し始めた運動部は、他校
との試合に勝つために猛烈な練習を開始した。
彼らは、勝利という明確な目標のもとに集団の
モラルを高めていった。彼らにとってスポー
ツは「勝たねばならぬもの」となった。試合の
結果である勝利も敗北もこうした意識をさらに
強めた。こうして「是が非でも勝たねばなら
ぬ」という至上命令は、集団のスポーツ信条と
して定着し、伝統として受け継がれていった。
担い手のスポーツ信条のひとつである勝利至上
主義はこうして醸成された。勝利という目標に
向かって集団が一丸となって練習し、プレイす
る、こうした彼らのスポーツは、単なる自己誇
示としての意味を越えて、「修養」としての意
味をもち得るものとなる。しかしながら、こう
した修養・精神鍛練主義の信条は、理念として
は存在し、彼らのスポーツを正当化するものでは
あっても、現実に担い手の意識の中核に存在
したのは、勝利至上主義の信条のほうであっ
た。ともすると弊害を起ししがちな彼らのスポ
ーツに対して「修養」の意味を付与したのは、
彼らの身近にあって、彼らのスポーツに理解を

示した教育者たちと、現役時代に勝利を求めて
スポーツに熱中したOBたちに負うところが大
きい。こうした論理の準拠枠となったのがいわ
ゆる「武士道の精神」なのであり、こうしたイ
デオロギーがやがて、後の飛田穂洲の「無私
道」なる野球信条に受け継がれていくことにな
るのである。

次に、きわめてアスレティックな性格のスポ
ーツ信条を形成するに至った担い手の社会心理
的動機的一端について記しておこう。

明治時代のわが国の運動部の主たる担い手と
なったのは、多くは立身出世を夢みて高等の教
育機関に入学した学生であり、彼らは社会的に
も経済的にも上流の階層に位置づけられる特権
階級の子弟がほとんどであった。学問によって
身を立て、競争社会のピラミッドを上昇するこ
とを約束された彼らは、エリート意識が強かつ
た。彼らは、知的英雄であり、また、競争心、
負けじ魂が強かった。こうしたエリート学生
の中でも実際にわが国のスポーツを担ってきた
のは、硬派でしかも蛮カラな学生であった。学問
の世界ですでにエリートであった彼らは、スポ
ーツの世界でも常にエリートでありたかった。
従って、彼らの主観においては、試合に勝つこ
とは、単に、肉体的、技量的な優越性を誇示す
だけではなく、エリートとしての精神的な優
越感を満足させることを意味した。敗者となる
ことは、肉体的、技量的、精神的な劣等性を意
味し、彼らのエリート意識を傷つけた。だから
こそ彼らにとって、試合は「勝たねば恥」の
ものとなったのである。選手たちのこうした意
識は、応援団をはじめとする寄宿舎の仲間や一般
の校友たちの過度な期待によってさらに強め
られた。選手たちは、「戦士」として勝つ責任を
負わされたのである。学校を代表する選手とし
て英雄視された者にとって、こうした期待にそ
むくことはこの上もない恥辱であり、校風の体
面をけがすことになる。そのために彼らは猛烈
な練習をした。また、そうした緊張した状況下
での練習と試合の経験の共有が、彼らの共属感
情と友情を深めた。内におけるこうした「和」

の意識と、外集団に対する敵愾意識とが、学校と学校との競争によって拍車をかけられ、強烈な対校意識となって現われたのである。運動部のこうした勝利至上主義的なスポーツ信条は、つまるところ「武士」的な恥の意識につながっているといつてよいだろう。

引用・参考文献

- 1) J. W. Loy, B. D. McPherson & G. S. Kenyon, "Sport as a social phenomenon", carried in "Sport and Social System", Addison-Wesley Publishing Company, 1978, pp. 3—26.
- 2) 好球生, 「ベースボールの来歴」, 新聞「日本」, 明治29年7月20日掲載。
- 3) 功力靖雄, 明治野球史, 逍遙書院, 昭和44年, 42～43頁, 44頁。
- 4) 君島一郎, 日本野球創世記, ベースボール・マガジン社, 昭和47年, 28～30頁。
- 5) 大和球士, 真説日本野球史, 明治篇, ベースボール・マガジン社, 昭和52年, 9頁。
- 6) 田原茂作, 日本野球史, 厚生閣書店, 昭和4年, 6頁。
- 7) 針重敬喜, 日本のテニス, 目黒書店, 昭和6年, 1～3頁。
- 8) 針重, 前掲書, 2頁。
- 9) 真行寺朗生, 近代日本体育史, 日本体育学社, 昭和3年, 61～62頁。
- 10) 東京帝国大学漕艇部, 東京帝国大学漕艇部五十年史 昭和11年, 4頁。
- 11) 東大漕艇部, 前掲書 4～5頁。
- 12) 同上, 7頁。
- 13) 同上, 7頁。
- 14) 宮田勝善, ボート百年, 時事通信社, 昭和41年, 97～98頁, 100～102頁。
- 15) 真行寺, 前掲書, 62～63頁。
- 16) 日本蹴球協会, 日本サッカーの歩み, 講談社, 昭和49年, 31頁。
- 17) 同上, 33頁。
- 18) 同上, 35～36頁。
- 19) 田原, 前掲書, 24～25頁。
- 20) 第一高等学校校友会, 校友会雑誌, 号外, 明治28年, 1頁。
- 21) 功力, 前掲書, 52頁。
- 22) 横井春野, 日本野球発達史, 水野利三, 大正11年, 25～30頁。
- 23) 五十公野清一, 日本三球人, 世界文庫, 昭和47年, 3～46頁。
- 24) 横井, 前掲書, 10～12頁。
- 25) 横井, 前掲書, 44～47頁。
- 26) 正岡子規, 「松蘿玉液」(明治29年7月19日), 木村毅, 明治文化資料叢書 第拾巻, スポーツ編, 風間書房, 昭和47年, 252頁所収。
- 27) 東大漕艇部, 前掲書, 7頁。
- 28) 宮田, 前掲書, 100頁。
- 29) 東大漕艇部, 前掲書, 9頁。
- 30) 東京日日新聞, 明治71年10月18日掲載。
- 31) 宮田, 前掲書, 107～117頁。
- 32) 東大漕艇部, 前掲書, 8～12頁。
- 33) 日本ラグビー, フットボール協会, 日本ラグビー史, 昭和39年, 18～27頁。
- 34) 同上, 55～62頁。
- 35) 池口康雄, 近代ラグビー百年, ベースボール・マガジン社, 昭和62年, 163～164頁。
- 36) 東京帝国大学, 東京帝国大学五十年史, 下冊, 昭和7年, 667～675頁。
- 37) 宮田, 前掲書, 116～117頁。
- 38) 学習院, 学習院史, 昭和3年, 306～318頁。
- 39) 石山, 海後, 梅根編, 教育文化史大系工, 金子書房, 昭和28年, 196頁, 204頁。
- 40) 高森良人, 五高七十年史, 五高同窓会, 昭和30年, 40頁。
- 41) 小椋博, 「明治期における学校運動クラブ変容に関する研究」, 昭和46年(東京教育大学, 修士論文), 195頁。
- 42) 慶応義塾, 慶応義塾百年史, 中巻, 前, 昭和35年, 168～171頁。
- 43) 東京文理科大学, 創立六十年, 昭和6年, 400～401頁。
- 44) 早稲田大学, 早稲田大学百年史, 第二巻, 上, 昭和51年, 590～591頁。
- 45) 京都帝国大学, 京都帝国大学史, 昭和18年, 55頁。
- 46) 旺文社, 早稲田大学一世の足跡, 昭和54年, 180頁。
- 47) 一高校友会, 前掲書, 2～46頁。
- 48) 一高校友会, 「野球部史」, 木村, 前掲書, 173～235頁所収。
- 49) 伊東卓夫, 癸卯野野球試合紀念, 明治36年, 1～

52頁。

50) 田原, 前掲書, 124~125頁。

51) 東大漕艇部, 前掲書, 1~400頁。

52) 慶応体育会庭球部, 慶応庭球三十年, 昭和6年,

11~79頁。

53) ラグビー・マガジン編集部, 日本ラグビー物語,
ベースボール・マガジン社, 昭和49年, 1~11頁,

21~42頁, 53~156頁。

A Study on the Formation Process of Sport Organizations in Japan (1)

Yuko KUSAKA

The purpose of this paper is to clarify the way of the development of Japanese sport organizations and its configurational characteristics by analyzing the formation process since the period when sport as a foreign culture was imported, grew in the environments of Japanese society, spread and diffused, until the period when its national level of governing organizations were formed. A central aspect of the overall process is the gradual emergence of modern sport organizations out of the games of play groups. More concretely, the stages in the development of the Japanese sport organizations were:

1. a stage in which the play groups, seeking only a ephemeral (or temporary) joy of the game, had begun to appear;
2. a stage in which the informal groups of the lovers of sport, whose members had been specified but still in the informal in terms of its group composition and its forms of activities, had begun to appear. They began to play matches each other individually;
3. a stage in which the formal groups of sport ("Undō-bu") as a part of school fraternities in the extracurricular activities had begun to be established. They had to win at any cost and play with "Bushido" spirit;